

第5次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物
The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

リュウキュウヤマガメ

Geoemyda japonica Fan, 1931

戸田守（琉球大学）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 爬虫類・両生類分科会



令和8（2026）年3月



特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：戸田守，2026. リュウキュウヤマガメ. 環境省（編）第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物， pp. 40-45.

Citation: Toda, M., 2026. *Geoemyda japonica* Fan, 1931. In: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 40-45.

リュウキュウヤマガメ

Geoemyda japonica Fan, 1931

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab

基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
---------	----------	---------	---------	---------

B2. 生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

分布範囲内の各地で、圃場整備や林道の敷設・拡張等に伴う環境変化が進行しているほか、外来の捕食者や外来のイノシシにより継続的に圧迫を受けている。加えて、違法な採集もリスクになっている。

評価分科会： 爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄島、渡嘉敷島、久米島だけに分布する沖縄諸島固有種。山地の森林や回復の進んだ二次林の林床に生息し、とくに溪流沿いや谷部に多い。圃場整備や林道の敷設・拡張に伴う生息環境の悪化、生息地の消失、外来の捕食者、外来のイノシシによる林床の過度の攪乱、販売用の違法採集などにより分布範囲の縮小と個体数の減少が懸念される。産卵数が少ないため、一度個体群が縮小すると回復は容易でないと考えられる。

基礎情報

【形態】

甲長は 65～156 mm 程度。背甲は長卵形かつわずかにドーム型で、椎甲板と左右の肋甲板の上にそれぞれ 1 本ずつの顕著な隆起（キール）がある。背甲後部の縁甲板は後外角が鋭く尖出し、背甲の後縁は顕著に鋸歯状になる。背甲の地色は褐色または赤褐色で、隆条に沿って暗褐色となるが個体変異も大きい。腹甲はほぼ全面が黒色で、黄色の縁取りがある。頭部と頸部の基色は赤褐色から暗褐色までさまざまなものがあるが、多くの場合、赤みの強い線状または斑点状の不規則な模様が入る。吻端は裁断状で、側方からみるとほぼ垂直。

【生活史】

交尾は主に 8～12 月、産卵は 4～9 月上旬にみられ、メスは、普通一度に 1～2 個の卵を、1 シーズンに 2～3 回産卵する。卵は長径 40～50 mm、短径 20～25 mm の細長い回転楕円体で、2～3 ヶ月ほどで甲長 33～36 mm の幼体が孵化する。孵化後 2～3 年で性成熟サイズに達することが知られている。野生個体の糞分析の結果から、おもに陸貝類や節足動物などの小型無脊椎動物を捕食するほか、カエル類など脊椎動物の死体、さらにはイヌビワの果実をはじめとする植物質も摂ることが知られている。一方、孵化して間もない幼体の捕食者としてアカマタの報告がある。

【生息環境】

山地の森林、回復の進んだ二次林の林床に生息する。とくに溪流に隣接した場所を好む傾向があり、浅い流れの中で見つかることもある。稜線近くの谷間で見つかることも多い。また、山間部の果樹園などでもみられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，湿地・湿原・細流，河川源流域 【陸域_平地部】森林，田地・畑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の沖縄島、渡嘉敷島、久米島に分布。渡嘉敷島の近くの慶留間島からも記録があるが、人為的に持ち込まれたものと考えられる。沖縄島では、かつては中部地域や本部半島にも生息していたとされる。さらに遺跡からの記録として、沖縄島の南部からも確認されている。現生の姉妹種スングラーヤマガメは、大陸中国の南東部やインドシナ半島北部に分布。後期更新世の絶滅種アマミヤマガメは、奄美諸島の徳之島から出土している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島ではかつては恩納村やうるま市以北の中部地域や本部半島にも生息していたとされるが、2000 年代以降の分布は名護市北部から大宜味村以北の地域にほぼ限られ、分布範囲は縮小している。沖縄島の中南部で個体が見つかることもあり、状況からして、人為

的に運ばれたものである可能性が非常に高いが、在来集団の残存である可能性も完全には排除できない。久米島では、少なくとも 1990 年代以降は生息地が北部の宇江城岳周辺と南東部のアーラ岳周辺に限られており、現在も分断された状態にあると考えられる。渡嘉敷島では、近年特に発見事例が少なくなっていて、分布域も限定される可能性が高いが、詳細は不明。

【生息地の現況】

分布域の広い範囲で林道や圃場の整備などに伴う人為的な環境変化が続いており、生息地は縮小している。渡嘉敷島では 1990 年ごろに持ち込まれたイノシシが野外で増え、2010 年代以降、様々な問題を引き起こしている。現在では、山地の斜面、沢沿い、林道沿いなど、いたるところでイノシシが底質を掘り返し、本種にも直接的・間接的に被害をもたらしている可能性が高い。

【個体数の現況】

個体数に関する直接的なデータはないが、近年の目撃頻度は明らかに減少しており、個体数が減少傾向にあるのは明らかである。特に、発見頻度から考えて、やんばると渡嘉敷島における個体数の減少は顕著である。

存続を脅かす要因

圃場整備、林道の敷設・拡張による生息地の縮小、環境の悪化が本種の生息に負の影響を与えている。加えて、イエネコやフイリマングースなどによる影響も懸念される。また、本来本種の分布域には自然分布しないミナミイシガメ（亜種ヤエマイシガメを含む）やセマルハコガメとの交雑個体も見つかっており、遺伝子汚染が進行する懸念もある。これらの事柄に加え、渡嘉敷島ではイノシシが増え、島内の山地や丘陵地のいたるところで土を掘り返した跡がみられる状況になっており、直接的、間接的に本種の存続に大きな負の影響を与えていると考えられる。また、海外のマーケットでの本種の販売が確認されており、実際に最近、本種をまとまった数を密輸しようとした事案が複数発生し、商業目的のためかなりの個体が捕獲されていることが改めて浮き彫りになった。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，圃場整備，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），交雑（外来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，圃場整備，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），交雑（外来種による）

特記事項

近縁種から地理的に大きく離れて分布する遺存性の高い種で、生物地理学的に高い学術的価値を有する。なお産卵数が非常に少ないため、一度縮小してしまった個体群の回復には時間がかかると思われる。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda japonica</i>	VU
第4次 2019:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda japonica</i>	VU
第4次 2018:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda japonica</i>	VU
第4次 2017:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda japonica</i>	VU
第4次 2015:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda japonica</i>	VU
第4次:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda japonica</i>	VU
第3次:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda japonica</i>	VU
第2次:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda japonica</i>	VU
第1次:	リュウキュウヤマガメ	<i>Geoemyda spengleri japonica</i>	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和6年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧 I B 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和7年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定天然記念物

参考文献

- 沈彦鵬・福山伊吹・福山亮部・浜中京介・山本拓海・岡本康汰・安里瞳，2022. 沖縄島北部におけるアカマタによるリュウキュウヤマガメの捕食例. *Akamata*, 29: 5-9.
- 福家悠介. 2016. アカマタによるリュウキュウヤマガメの捕食例. *Akamata*, 26: 3-7.
- Janssen, J. and C. R. Shepherd, 2019. Trade in endangered and critically endangered Japanese herpetofauna endemic to the Nansei Islands warrants increased protection. *Curr. Herpetol.*, 38: 99-109.
- 太田英利・濱口寿夫（編），2003. 沖縄県天然記念物調査シリーズ 第41集-リュウキュウヤマガメ・セマルハコガメ生息実態調査報告書. 沖縄県教育委員会，那覇. 99pp.
- 太田英利，2014. リュウキュウヤマガメ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-3 爬虫類・両生類. pp. 32-33. ぎょうせい，東京.
- 鈴木大，2021. リュウキュウヤマガメ. 日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 97-98. サンライズ出版，彦根.
- 高橋亮雄，2017. 琉球列島の第四紀陸生および淡水生カメ類相とその動物地理学的意義. 化石研究会会誌，50: 10-21.

- 当山昌直, 2017. リュウキュウヤマガメ. 沖縄県環境部自然保護課 (編) 改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 (動物編) –レッドデータおきなわ–. pp. 183–184. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
- Yasukawa, Y., H. Ota, and T. Hikida, 1992. Taxonomic re-evaluation of the two subspecies of *Geoemyda spengleri* (Gmelin, 1789) (Reptilia : Emydidae). Jpn. J. Herpetol., 14(3): 143–159.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Geoemyda japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Geoemyda japonica* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Farmland, Wetland/Marsh/Stream, River headwater 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest, Farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Field preparation, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Hybridization (with alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Natural Monument.



執筆者: 戸田守 (琉球大学)
Author: Mamoru Toda

公表年月: 2026 年 3 月